

平成22年 5月12日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520596

研究課題名（和文） 近代イラン社会運動史の研究

研究課題名（英文） Historical Study on Social Movements in Modern Iran

研究代表者

黒田 卓（KURODA TAKASHI）

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：70195593

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀後半以降のイランにおける社会運動の系譜を念頭に置きながら、おもに立憲革命（1905-1911）とジャンギャリー運動（1915-1921）を研究対象とした。とりわけ後者に関する未公開のペルシア語および英語の原文書を現地の文書館などで収集し、それらを読解・翻訳した。またロシア語文書も利用して、ジャンギャリー運動末期に成立した「イランソヴィエト社会主義共和国」（通称「ギーラーン共和国」）に関して研究成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：Taking a genealogy of social movements in modern Iran into consideration, I mainly focused on the Constitutional Revolution (1905-1911) and the Jangali Movement (1915-1921) in this study. While collecting unpublished original Persian and English documents related to the latter in both Iranian and British archives as extensively as possible, I made efforts to peruse and translate them into Japanese. Moreover, making use of Russian archival materials, I published some of research achievements about the 'Soviet Socialist Republic of Iran' (the so-called 'Gilan Republic') which was declared in the last phase of the Jangali movement.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：西アジア史・イラン近代史・社会運動史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) イランは現在人口7千万人を擁し、日本の4倍近くの国土面積を有する中東の大国の一つである。にもかかわらず、1979年の

イスラーム革命以降の政治的激動、とりわけ政権の対米強硬路線、イスラーム主義的な政治・社会的パフォーマンス、そして最近では核技術開発問題に、日本のみならず国際社会

の耳目が集まりがちであり、他方でその豊富な石油・天然ガスを初めとするエネルギー資源の開発・確保に関心が集中している。しかし翻って考えてみると、現代国際関係や資源経済学の視点だけからでは、例えば現代イランにおいて核技術開発自主権に対して、国内の保守派・改革派の別を問わない、いわば国民的支持が相当根強く存在することは理解しがたいことのように思われる。19世紀以来、この国が植民地化こそ免れたとはいえ、英露両大国、および第二次大戦後は米ソ両大国（とくに米国）の政治的・経済的従属下に置かれ、それらへの反発・抵抗を経ながら大国の利害に翻弄されてきた歴史の歩みを抜きにしては、この国に対する深い洞察が得られないと考えられるからである。そこで、本研究では近現代イランにおける民衆主体の社会運動の系譜を背景としつつ、イランが国民国家として形成される20世紀前半を中心に研究を深めることとした。

(2) イラン本国において近現代史研究が冷静かつ実証的に自らの過去を分析しているかと言えば、必ずしもそうとは言いきれない。イスラーム革命後の対イラク戦争と国内混乱により歴史学研究に断絶が生じ研究環境が激変したことに加え、上述のような屈辱的な「歴史の記憶」に端を発する「大国陰謀論」やナショナリズム言説に基礎を置く平板かつ自国中心主義的な歴史記述、そして近年では現在の政権が標榜するイスラーム主義的に潤色された修正主義が横行し、近現代史の研究領域が「政治闘争のアリーナ」と化するような状況から未だ十分に脱却し切れていないといえる。こうしたイランにおける研究状況を鑑みるに、また西欧および旧ソ連・ロシアの研究者とは異なり、この国の近現代に参与する経験の少なかった日本の研究者は、相対的にはあるが、価値中立的な立ち位置を取れる有利性を備えていると考えられる。本研究代表者はこの有利な立場を活かして、実証的な研究を進展させるための基盤を可能な限り整備する作業に取り組む必要性に思い至った。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は大枠として2つの視角に立って研究を進めることに留意した。つまり、①本研究代表者がこれまでに蓄積してきた立憲革命とジャンギャリー運動およびいわゆる「ギーラーン共和国」に関する研究成果を踏まえながら、新たな史料の収集・整理・解読に基づきつつ未解明の領域を中心に解明を進める。それらの作業を通して、本格的ではないにしろ研究史の面からは相応に把握に努めてきた19世紀中葉のバーブ運動、同世紀末のタバコ・ボイコット運動などとつ

き合わせ、民衆主体の社会運動の系譜論として理解できるように定位を試みる。

②これら2つの運動を従来行われてきた政治・事件史的視点からのみ扱うのではなく、社会との関わり、日常と非日常とのせめぎ合いの位相で観察する社会運動の方法論で読み直すことを試みる。

(2) 立憲革命が終焉してから本研究課題開始期にちょうど百周年を迎え、イラン本国で相次いで新たな史料・研究が公刊されるという状況下で、まずはそうした文献資料の収集を系統的に行うことを目的とした。また、同革命の最大の果実として開設された国民議会と地域社会を結ぶ結節点として地方アンジョマンと称される住民組織に注目し、それらの特性の抽出を目指した。

(3) ジャンギャリー運動および「ギーラーン共和国」に関しては、以下の2つの点を目的とした。

①「共和国」成立以前のジャンギャリー運動については、従前まったく閑却されてきた社会的側面、とりわけ彼らがどのような社会秩序を築こうとしたかを明らかにすべく、関連文書史料の発掘と解読を心がける。

②「共和国」に関しては、この出来事にロシア・ボリシェヴィキが深く関与した関係で大量のロシア語文書が残存しており、ソ連解体後それらの秘匿されてきた文書が公開されアクセスが可能となったため、ロシア語アルヒーフの収集・解読を進め、ヴェールに包まれてきた事実関係を明確にするとともに、モスクワ、バクー、テヘラン、そしてギーラーン州現地との錯綜した関係性にも照明を当ててみることを試みる。併せて当該期におけるイギリス側公文書の調査も実施する。

## 3. 研究の方法

(1) 立憲革命関係を中心としたイラン近代史関連文献の系統的な収集。イランに調査出張を行い、出版事情を把握し重複入手をできるだけ回避するため精選のうえ入手に努め、東北大学附属図書館に収集文献を配置する。

(2) ジャンギャリー運動および「ギーラーン共和国」関連文書史料の解読・整理。すでに同運動関係文書集は研究代表者が確認している限りで3点ほどが刊行されている。一つ目はイラン国立文書局から出版されたもので、これについては全点解読済みであるが、同文書集収録文書以外に膨大な文書が文書局に所蔵されていることが確認されているので、それらに関する追調査が必要である。二つ目はイラン外務省文書出版部から公刊された外務省文書集であり、これに関しては未着手であるため、本研究作業の一環として

解説に取り組み、データ蓄積を行う。三つ目は2005年にラシュト市で開催されたジャンギャリー運動研究学会と併催された関連文書展示会に出展された文書の集成であるが、その性質上編纂に系統性がない。しかしイラン現代史研究所収蔵文書が相当数採録されているので、同研究所での文書調査と並行して読解すれば有用であるため照合とリライト・解読作業に取り組む。このような見通しの下に、既刊の文書集の解説を進めながら、それらの収蔵機関での調査活動を同時に行い文書の位置づけと分析作業を実施する。

(3) ジャンギャリー運動および「ギーラーン共和国」関連未公開文書・史料の収集と解説。前記(2)で述べたように、公開文書集には収録点数や編纂方針の点で各々に瑕疵が見られるため、今までに行ってきた点検作業を継続すると同時に、新たな文書史料の収集を行う。とくにイラン・イスラーム議会図書館・資料センターが所蔵する当該期のアクセスが困難な新聞資料、『イラン』紙や『ラアド』紙の関係記事を手に入れ解説を進める。これはジャンギャリー運動と地域社会との接点を探るための基礎データを整えるためである。

(4) ジャンギャリー運動および「ギーラーン共和国」関連ロシア語文書およびイギリス公文書の入手と解説。「ギーラーン」共和国に関しては、近年公開されたロシア語文書の利用が不可欠である。研究代表者がすでに収集したロシア国立社会政治史文書館(RGASPI)所蔵文書の解説作業を進める。また、イギリス側の認識・政策を探究すべくイギリス国立文書館(the National Archives)に所蔵のイギリス外務省公文書の調査・収集を行う。

(5) 以上の一連の作業を通して、ジャンギャリー運動および「ギーラーン共和国」関連のデータ構築を推進し、文書史料集の編纂に向けた基盤整備に取り組む。また、その過程で得られた研究成果については随時公表を予定する。

#### 4. 研究成果

(1) 立憲革命を中心としたイラン近代史関係文献の系統的な収集。2007年8月末から9月初旬、および2009年3月前半の2度にわたってそれぞれ10日間程度イランへの調査研究のための出張を行った。その折に、前述したように百周年を契機に数多く出版されつつある立憲革命関係の専門研究書、史料集、新聞復刻など総計で100点を超える新刊書籍を収集し東北大学附属図書館に収蔵した。その中には、テヘラン大学中央図書館が所蔵する立憲革命期新聞の復刻シリーズ、イラン国立文書局・図書館が推進する立憲革命前夜の

在外新聞復刻のシリーズ、政府要人やウラマーの回想録など、日本では入手がかなり困難と思われるものも含まれる。わけても立憲運動と地域社会との接合面を見るうえで必須とソースとなる、地元文書なども収めた地方における立憲運動文献を重点的に集めるように留意した。ケルマーンシャー、ガズヴィーン、ヤズド、マーザンダラーンなど従来スポットを浴びなかった地域における立憲運動史文献を入手した。これらは地方アンジョマンに関する情報を含んでおり、今後の研究素材として有益なものとなりえるであろう。

(2) ジャンギャリー運動および「ギーラーン」共和国関連未公開文書・史料の収集と解説・翻訳作業。

①未公開文書・史料収集：2回のイラン出張の際に、テヘラン大学中央図書館、イラン国立文書局・図書館、イラン外務省文書・研究サービスセンター、イラン・イスラーム議会図書館・資料センター、イラン現代史研究所などを訪問し、文書・史料の所在確認・照合作業を行った。イラン国立文書局を除き、文書原物の複写などには多くの制約があるのに加え、複写サービスに日時を要するのが通例であるため、短期の滞在期間中に大量の文書・史料を複写することは不可能であった。しかし研究代表者は2001年以来数度イランに赴き、とくに2005年には半年間テヘランに滞在したときに、上記の代表的研究機関ですでに調査および文書収集を行った経験があり、その成果を基に文書・史料の所在をある程度まで効率的に実施することができた。なかでも、イラン・イスラーム議会図書館・資料センターでは、『イラン』紙、『ラアド』紙の未収部分を補うことができた。また、2009年12月初旬にイギリスに10日間程度の調査研究出張を行った。この目的はおもにイギリス国立文書館に所蔵されるイギリス外務省の公文書の調査収集であったが、1919～1921年にかけてのロンドン本省・テヘラン公使館往復文書ファイル(F0371シリーズ)14冊、ラシュト領事館・テヘラン公使館往復文書ファイル(F0248シリーズ)2冊を調査し、関連文書を647葉複写注文し、それらは本年1月に到着した。現在、整理分類作業を終え、解説作業に着手したところであるが、イギリス側の対ボリシェヴィキ、対「ギーラーン」共和国認識および対策を解明するための貴重な情報を内包するものである。

②関連文書の解説・翻訳作業：大別して5種類の文書・史料の解説・翻訳作業に取り組んだ。

第一は前に触れたイラン外務省関係文書集(R. Sadat 'Azimi (ed.), *Nehzat-e Jangal be Revayat-e Asnad-e Vezarat-e Omur-e Khareje*, 1377 Kh. (1999))である。1917年

11月から1918年9月にかけて、おもに本省に宛てて送達された同省出先機関、ギーラーン在外事代理局(edare-ye kargodhari)の書簡・電文58点。詳細な解析は今後に譲りたいが、これらの文書群を通覧してジャンギャリー勢力が外事代理局を介して中央政府と要請や交渉を重ねていたプロセスが判明した。

第二は第一の公文書類とは違って私文書と称すべきもので、イラン随一の大商人ハージ・ホセイン・アミーノッザルブがギーラーンに所有した土地を管理委託されていた代理人たちから受領した書簡群(I. Afshar (ed.), *Barg-ha-ye Jangal: Name-ha-ye Rasht va Asnad-e Nehzat-e Jangal*, 1380 Kh. (2002)所収)、43点(1916年3月~1918年8月)。発信者の差配人としての立場上文面からはギーラーンでの農業経営にジャンギャリー勢力が介入していく状況を訴える場合が大半ではあるが、裏返していえば、不在大地主層に対してジャンギャリー運動が自覚的に自営農民や土地なし農民層に有利な関係調整を企図していたことを物語っている。「ギーラーン共和国」期での土地問題の重要性を考えれば、それ以前にジャンギャリーが土地や徴税の分野にどういう態度を採っていたかを窺いえる稀少な史料である。

第三はイスラーム議会図書館・資料センター所蔵の政府系日刊紙、『イラン』紙および『ラアド』紙の関連記事である。両紙は復刻版や電子データが原則的になくハードコピーも不許可のため、デジタル写真化や書写などの手段で記事を抽出したうえで複写するという手法を採った。上記所蔵機関が未収蔵であったり、デジタル写真が不鮮明で解読不能であったりする場合も部分的にあったが、1917年11月から1920年11月までの3年間に両紙に掲載された関連記事を網羅的に解読・訳出を行う作業を完了した。参考までに年次別に記事本数を下に掲げておく。

1917年3本(『ラアド』紙のみ)

1918年25本(ただし両紙10月以降未収蔵)

1919年17本(ただし両紙4月まで未収蔵)

1920年26本

総計で71本の記事であるが、もちろん記事の長短はさまざまで、政府や州知事の告知文掲載記事のような長文のものもあれば、ラシュト在通信員からのわずか数行の短い情報記事もある。これら新聞記事のメリットは、政府の対ジャンギャリー認識を跡付けることができること、および現場通信員からの情報、政府筋からの情報が拾えるところにある。

第四はイラン現代史研究所が所蔵する内務省関連の公文書類である。これらは体系的に整理されているとはいえないが、外務省以外の政府公文書が不在の中では有用な史料である。書写しえたもののうち、1919年の州

知事アフマド・アーザリーが作成した文書を10点程度リライトならびに訳出した。イラン国立文書局ですでに収集した未公刊文書数十点は未着手で、今後この分野での作業の進展が大きな課題である。

第五に収集済みのロシア語文書である。専ら「ギーラーン」共和国期に関わるものであるが、主要なものについては解読・訳出を完了していたが、本研究で発表や論文をまとめる際に、分析をさらに深める作業を行った。なお、ロシア国立社会政治史文書館所蔵の「ギーラーン共和国」関連文書約270点を収める文書集が昨年刊行された(*Persidskii front mirovoi revolyutsii: Dokumenty o sovetskom vtorzhenii v Gilyan (1920-1921)*, 2009)。本文書集からも未収の文書を中心に解読・訳出を行った。

以上の関連する文書・史料の解読・訳出作業を通して史料基盤を築くことができたが、なお未公刊ペルシア語文書をこれらに加える必要があり、今後の課題としたい。

### (3) 公表した研究成果

①立憲革命およびジャンギャリー運動に関する成果：立憲革命と「ギーラーン」共和国の双方の事件に深く関わった人物として、ヘイダル・ハーン(1880~1921)という革命家が挙げられる。本研究代表者はかつてこの人物の活動、思想、人的ネットワークについて、おもに数種のペルシア語、アゼルバイジャン語の伝記史料、家族文書、新聞論説を駆使して考察したことがあった(「ヘイダル・ハーンと近代イラン」『西南アジア研究』No. 36, 1992)。その後10数年を経て、ロシア語アルヒーフが公開され、イランでもハータミー政権期に文書利用環境がある程度まで整備され、第一次大戦中のドイツを舞台とした彼の活動がドイツ語公文書により明らかになるという研究条件の激変を受けて、新たにロシア語文書やペルシア語文書を活用して、彼の事績を「ヘイダル・ハーン的事績再考」と題する論文の中で分析を試みた。また同時に、この試みは立憲革命からジャンギャリー運動、「ギーラーン共和国」へと連なる動向を探究するうえでも恰好のテストケースとなりうると考えたからである。

その結果解明された諸点を要約すると以下のようなになる。イラン国立文書局・図書館で発掘した公文書に基づき、立憲革命末期に彼が国外追放命令を受けたときに、彼は警察に護送される犯罪者ではなく、むしろ同志を帯同しつつ各地でデモクラート党の煽動・組織活動を展開する革命家として振舞っていたこと、ドイツに移ってからも在外デモクラート党指導部と連携を図りつつ、国民義勇軍の編制に熱意を燃やしていたこと、さらに革命後のロシアに活動の場を移してからは、ボ

リシェヴィキと接触を深める一方で、イラン人移住者とも交遊しつつイラン共産党「アダーラト」の「右派」グループを指導する立場にあったこと、しかし激しい党内論争を経てコミンテルン指導部やモスクワの党中央に見放され、最終的には彼は陰に陽に庇ってきたアゼルバイジャン党指導部にさえ見捨てられ、混乱を極めていた「ギーラーン共和国」の渦中に身を投じたこと、などが明らかになった。総じていうなら、彼は激動する環境に適応しながらも、立憲革命期以来の社会民主主義的な立場からさほど遠くには離れていなかったことが判明した。こうした知見は国内外でも未発表でユニークなものといえる。

「ギーラーン共和国」に関連して、研究期間内に2度の研究発表を行った。第一は2009年3月の「イランソヴィエト社会主義共和国におけるコムニスト政変をめぐる」と題する発表である。これはジャンギャリー勢力と1920年5月にギーラーンに上陸したポリシェヴィキ軍との同盟後わずか1ヶ月後の7月31日に起こされたコムニスト主導の政変を題材に、その事件の背後に「革命の統括本部」とも呼ぶべきイラン・ビューローなるコムニストの合同組織が存在しきわめて組織的にこの同盟破壊を目的とした政変を企てた構図を明らかにするとともに、その後のポリシェヴィキ活動家内部でこの政変の評価をめぐるさまざまな見解が錯綜していた見取り図を描いたものである。

第二は2010年2月に東北大学東北アジア研究センターが主催した「歴史の再定義」と題する国際シンポジウムでの発表である。ここでは『「ギーラーン共和国」(1920-1921)をめぐる歴史と歴史認識：モスクワとバクー」なるタイトルで、1920年秋頃から顕在化するイラン共産党内の党派論争をロシア語議事録などに基づいて解明しつつ、他方で「ギーラーン共和国」をめぐる歴史認識を主題に、ソ連期とポストソ連期、およびアゼルバイジャン歴史学界における歴史記述の変容を辿った。以上の2つの研究発表を主たる材料にして、2010年3月までに「イランソヴィエト社会主義共和国 {「ギーラーン共和国」}におけるコムニスト政変：その歴史の再構成と歴史認識の変遷」と題した論文を完成させた。これは本年度中に、東北大学東北アジア研究センターの出版物に掲載される予定である。

②近代イランの社会運動系譜論に関する成果：「変容のなかのイスラーム主義」という論稿は、イラン近現代史の思想的潮流形成の概観を踏まえ、イスラーム主義がイランで政権を掌握したメカニズムと、それが近年変容しつつある有り様を論述したものである。本研究との関連でいえば、イランのイスラーム主義がそれ自体自己完結したものではなく、

立憲革命期以来根強く生き残ってきた左翼的思潮との融合的要素も併せ持つことを指摘したところに特徴がある。また、エドワード・サイードの後継者とも目されるポストコロニアル批評の旗手、ハミード・ダバーシーの意欲的な近著『イラン、背反する民の歴史』（田村美佐子・青柳伸子訳、作品社、2008）の書評論文は、伝統/近代の二項対立の陥穽を排する「反植民地的近代性」なる独特のコンセプトの下に、近代イランの歴史を多文化・多声的に描出するその手法を紹介する一方で、論拠とする業績への評価をめぐる批判的に検討を加えたものである。さらに、近々刊行予定の朝倉世界地理講座第6巻『西アジア』に掲載予定の「イラン人」という一節では、ナショナリズムの系譜論を概説するとともに、近年イランでも在外イラン人識者の論議にも啓発され、ナショナリズムの近代性を強調する言説が現代イランでも現れ始めていることに注目した。

2009年1月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が主催した国際シンポジウム「イランとコーカサスにおけるエスニシティと国家」において、ディスカッサントを務めた。とりわけ、アムステルダム国際社会史研究所教授 T. アターバキー氏の発表に対して、近代イランにおける中央と周縁との関係という文脈で、彼が取り上げたヒヤバーニーの運動との比較においてジャンギャリー運動と中央との関係などについて英語でコメントを行った。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 黒田 卓、伝統/近代の二項対立に抗うイラン金現代史の挑戦的な試み、図書新聞、査読無、2875号、2008、p.5
- ② 黒田 卓、変容のなかのイスラーム主義、インターカルチュラル（日本国際文化学会年報）、査読無、5巻、2007、pp.56-61
- ③ 黒田 卓、ヘイダル・ハーンの事績再考、上智アジア学、査読無、25巻、2007、pp.197-220

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006992546/en>

〔学会発表〕（計2件）

- ① 黒田 卓、「ギーラーン共和国」(1920-1921)をめぐる歴史と歴史認識：モスクワとバクー、東北大学東北アジア研究センター主催国際シンポジウム、2010年2月21日、東北大学片平キャンパス萩ホール
- ② 黒田 卓、イランソヴィエト社会主義共和国におけるコムニスト政変をめぐる

て、イラン研究会年次大会、2009年3月  
28日、大阪大学外国語学部

〔図書〕(計1件)

- ① 黒田 卓、朝倉書店、朝倉世界地理講座  
第6巻『西アジア』、2010、pp.135-137,  
267-271

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

黒田 卓 (KURODA TAKASHI)  
東北大学・大学院国際文化研究科・教授  
研究者番号：70195593

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：